

「小論文」(1/2)

高度教職実践専攻 高度教職実践専修

次の問題1、問題2に答えなさい。なお、試験終了後、解答用紙(2枚)のみ提出すること。

問題1

学習指導要領の改訂、新型コロナウイルス感染症の教育への影響、そしてGIGAスクール構想により、1人1台端末など学校におけるICT環境整備の取組が進められている。

このような状況を踏まえ、文部科学省は、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)」において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の重要性に言及している。

この資料の中で「個別最適な学び」については、以下のように説明されている。

令和3年答申^{※1}では以下のとおり、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されています。

- 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。
- 基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)」7ページから引用(下線は削除)

※1 「令和3年答申」とは、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(令和3年1月26日中央教育審議会)を指す。

そこで、この「指導の個別化」と「学習の個性化」について、授業における具体的な取組例をそれぞれ考え、200字以上300字以内で記述しなさい。なお、具体例を考える際には、学校種、学年、教科は自由に設定して良い。また、教室には児童生徒1人1人にパーソナルコンピュータやタブレットが配付され、高速大容量の通信環境が整備されていることとし、その利活用についても言及することとする。

配点：50点

2枚目に続く

問題2

下に示す事例は小学校における学習指導場面である。児童Aへの学習支援をどのように実施すると良いかについて、あなたの考えを1000字以上1200字以内で記述しなさい。なお、解答の際には、問題1の「個別最適な学び」の概念を踏まえ、次に示す「解答の際の論点」に必ず言及することとする。

<解答の際の論点>

- 児童Aの学習を阻んでいる要因
- 学習支援のために実施すべき具体的な取り組み・環境調整
- 実施した学習支援が効果的かどうかをどう判断・評価するか

<事例>

児童Aは小学校6年生の児童である。入学時から書くことが苦手で、ひらがなや漢字に間違いも多くあり、またマス目から字がはみ出してしまうことも珍しくなかった。板書をノートに書き写すことなども多くの時間を要しており、休み時間や放課後の時間を使って、担任の教員が支援をしながら学習をしてきた。しかし、小学校4年生の頃から書く場面において、より多く時間がかかるようになり、教員が支援をしても書き終わらないことが増えていた。

小学校5年生になると国語の成績が悪くなり、板書をノートに書き写すこともプリント学習もやりたくないと言って、授業中に集中していない場面が増えてきた。担任の教員が声かけをして、ノートに書くように促したり、マス目があり1.5倍に拡大してある書きやすいプリントを用意したりしたが、児童Aは書くことをしなかったために、国語の学習が完全にできなくなってしまった。漢字ドリルに手をつけず、作文課題などもやらなかった。保護者に連絡し、家庭学習の状況について尋ねたところ、家庭でも書くことを嫌がっていたが、自宅にあるタブレット型の教材では毎日勉強をしているとのことで、タブレットを使う際にはあまり困っている様子はないということであった。また漫画やライトノベルが好きで、食事中に本が手放せずに叱られることもあるという話もあった。

小学校6年生になると、国語だけではなく他の教科でも書くことを嫌がるようになり、学習に取り組めなくなる場面が増えてきた。英語の会話場面、理科の実験、社会の校外学習の報告会、調理実習など書く活動が少ない、もしくはほとんどない学習活動であれば積極的に参加し十分に学習のねらいを達成できた。しかし、書く活動が学習に含まれると手を付けず、担任の教員が支援しようとする顔に顔を伏せてしまうようになった。また、グループ学習にも参加せず、自分がまとめたものを発表する場面では、教室から出て行ってしまいうこともあった。

担任の教員が児童Aになぜ学習をしないのか直接尋ねると、「書くのが遅いのがクラスの中で目立つし、書いているうちに内容もわからなくなるから書きたくない」ということであった。どのように学習したいかを尋ねたところ、「書かないで勉強したい」とことと「もっと他の子の考えを聞いたり、自分の考えを表明したりしたい」ということであった。

配点:150点

